温泉へいこう

作＝かくたん

第１章

仕事を終えたＯＬ達が着替えをしている。

この女子更衣室は、ある会社の営業１課と営業２課の女性社員が使用していた。

「今日も疲れたわ。セクハラ上司の相手はほんとうにいやになるわ」

「わたし、今日もさわられたのよ。今年もあとわずかだけど、エッチな男性達にセクハラされた１年だったわね」

「最後にスカッとさわぎたいわね。このままじゃストレスたまりっぱなしよね。幹事さん期待してるわよ」

ＯＬ達はお喋りしながら着替えていた。

この２課のＯＬ達は毎年、女性だけの忘年会を行なっていた。

今年の忘年会幹事には営業１課の恭子が、副幹事には同じく１課の亜美と２課の由美が決まっていた。

恭子「今年の忘年会は温泉で宴会をやることに決めました。宴会で行なう余興を考えておいて下さい」

亜美「温泉で宴会だけじゃね。セクハラ男のストレスをぶっ飛ばすようなのないかな」
由美「そうね。男ならストリップでもやりゃストレス解消になるんだろうけどね。ねえ、ホストを呼んで奉仕させるってのはどう。」
恭子「そんな予算はないわよ」
「ハハハハ。」
ＯＬ達はみんなで笑った。

私服に着替えようと下着になった恭子は、窓の隙間から小型カメラがこちらを見ているのに気づいた。
恭子「あっ、みんなそのままにしててよ」
恭子はそっと窓の外へまわった。
そこには肩車した二人の若い男が、カメラで女子更衣室の覗き撮りをやっていた。下の男は足を踏ん張って重そうにしている。
恭子はその男の後ろへ忍び寄り、足の甲で下の男の股間を蹴り上げた。
パコン。
「ゲッ」
股間を蹴り上げられた下の男が倒れたため、上のカメラ男も転がり落ちた。

カメラ男があわてて逃げようとしたので、恭子はカメラ男の股間を蹴り上げた。
パコン。
「ワッ」
痴漢男は二人とも股間を押さえてうずくまった。

恭子「さっ、こっちへいらっしゃい」
恭子は股間を押さえている二人の襟首をつかみ、ＯＬ達の前へ引きずり出した。
恭子「こいつら女子更衣室を覗き撮りしてたのよ」
亜美「男ってどうしてこうなのかしら。でも、相手が悪かったわね。恭子は空手やってるのよ。逆らっても股間を蹴られるだけよ」
恭子はある空手道場の護身術コースで金的蹴りを教わっていた。
由美「みんな、こいつら警察に突き出しましょうよ」
痴漢男「警察だけは勘弁して下さい」
亜美「そうね。警察に突き出してもすぐに出ちゃうものね。じゃ、恭子に急所蹴りのお仕置きをしてもらおうかな」
痴漢男「わ、わ。それも勘弁して下さいよ。謝りますから」
恭子「そうだ。ねえ、痴漢さん。今度温泉で女だけの宴会やるんだけど、いっしょにきて手伝っ

てくれない。ちゃんと私達に奉仕できたら勘弁してあげるわ」
「あまくない」
ＯＬ達がいった。
恭子「私に考えがあるの。こいつらにも反省させて、私達も楽しめるようにね」
痴漢男「許してもらえるんなら、何でもやります」
「女性と一緒に温泉で宴会だなんて。こりゃ、もうけたかもな」
二人の男はしめしめと思った。
痴漢男「おいらは武男でこいつは相棒の正男と申します。せいぜいご奉仕しますんで、よろしくお願いします」
恭子「これからしばらく、あんた達をこき使わさせてもらうわよ。いいわね」
武男「へい」
「男が一緒なんてイヤだけど、幹事の恭子が言うのなら仕方ないわね」
ＯＬ達はいやいや納得した。

宴会の日がやってきた。
バスが温泉旅館につくと、女性達は楽しそうに部屋でくつろいだ。
恭子「武男と正男、さっさとみんなの荷物を運びなさい」

武男と正男は幹事の恭子に命じられ、女性達の荷物を運んだ。
亜美「こりゃ、楽ちんだわ。男を連れてきて正解かもね」
恭子「まだまだ、これからよ。副幹事さん、宴会の余興を相談しましょう」
恭子と亜美、由美は密かに余興の相談をしてから全員を集めた。

恭子「みなさん、宴会の準備ができるまでゆっくり温泉に入って下さい」
武男「おいら達も入っていいのかな」
恭子「ここは貸しきりで女風呂しかないのよ。あんた達は私達の背中を流しなさい。女性が出たら自分の体を洗っていいわよ。ただし、時間の関係で、ゆっくりあったまるのは後にしてもらうわ」
正男「てことは、もしかして一緒に入るってことっすか」
恭子「特別に許すわ。ただし、変なことしたら金玉を蹴り潰すわよ」
武男と正男は思いがけない事態に喜んだ。女性達はいやがったが、幹事の言うことなので仕方なく従った。

入浴が始まった。
亜美「いい温泉ね。そろそろ体を洗うわ。武男、背中を流して」

武男「へい、へい。こちらへどうぞ」
武男は亜美をいすに座らせ、背中を流し始めた。
武男「なんなら前も洗いましょうか」
亜美「バカ言ってんじゃないわよ。それよりあんた、前立ってるよ」
由美「正男もおっ立ててるよ。見苦しいからひっこめなさいよ」
正男「す、すみません。みなさんのお体がお美しいもので。これはどうにもなんないっす」
由美「男はどうしようもないわね」
「プハハハ」
女性達が大笑いした。
女性達が出た後、武雄と正男は洗面器やタオルを片付け、恭子に言われたとおり自分たちの体を洗った。

宴会が始まった。
恭子「みなさん、今年一年ほんとうにご苦労様でした。飲んで騒いで、セクハラ男のストレスを吹き飛ばしましょう。今回は痴漢男が二人いますので、ご自由にこき使って下さい。では、乾杯」
女性達がビールをいっきに飲み干した。
「風呂上りのビールは格別ね。おーい、武男、ビールがないよ」

酒が進むにつれて女性達の本性が現われた。
「おい、こら、正男。酒がないだろ。もたもたすんな」
武男と正男は女性達の接待に追われた。
女性達が膝を組んだため、浴衣の裾からはパンティが見えていた。それを見た武男と正男は、前を大きくしながら女性達の接待に励んだ。

恭子「ここで武雄と正男は余興の準備に行きます」
武男と正男が恭子のところへやってきた。
恭子「二人とも今のうちに温泉へ入ってきて」
武男「え、いいんすか。接待で疲れたし、お言葉に甘えて入ってきます」
恭子「しっかりあったまってよ。しっかりとね」
武男と正男が温泉に入った。
武男「いやー、いい湯だな」
正男「ほんと、これで覗きを見逃してくれたらラッキーだぜ」
暫くして、恭子が武男と正男が温泉につかっているところへやってきた。
恭子「下着はわたしが預かっとくから、温泉からあがったらこれをはいてきてちょうだい」
武男「なんすか、それ」

恭子「黒のパンストよ」
正男「えっ、何でまたそんなものを」
恭子「そりゃ、女性だけの宴会だもの、男の下着は見たくないのよ。女性の裸をただで見れたんだからいいでしょ」
武男「なるほどね。浴衣で隠すからいいや」
恭子「じゃ、準備できたらみんなまってるから余興の手伝いをやってね」
武男「おやすいご用で」

二人の男が頭から湯気をたてて温泉から上がってきた。
恭子「ずいぶんあったまったみたいね。いい感じよ。じゃ、二人とも浴衣を脱いで」
武男と正男は不信ながら浴衣を脱いだ。
「プハハハハハ」
パンストで押しつけられたサオと玉を見て、女性達が大笑いした。
余興の説明が始まった。
恭子「ただいまより、1課対2課の対抗ゲームを行ないます。負けた方にはバツゲームがありますからがんばって下さい。まず、1課、2課ではおもしろくないので、各チームのリーダーはチーム名を決めて下さい。それから、この二人の男のうちどちらかをマスコットにします」

1課のリーダーは亜美、2課のリーダーは由美になった。
マスコットの男はジャンケンの結果、亜美のチームが選ぶことになった。
亜美「1課のチーム名は金ちゃんチームです。マスコットの男は武男にします」
由美「2課のチーム名は玉ちゃんチームです。マスコットの男は正男です」
恭子「チーム名とマスコットの男が決まったところでゲームを開始します。題して、ストレス解消金玉いじめゲームよ」
「わー、おもしろそう」
女性達がさわいだ。
武男「金玉いじめって、なにされるんすか」
恭子「大丈夫よ。潰したりしないわよ。遊びよ。あ、そ、び」
亜美「女性はセクハラ男をやっつけたいのよ。女が男をやっつけるとすればこれしかないでしょ」
由美「それに、なんでもやるって約束だしね」
女性達のストレス解消ゲームが始まろうとしていた。

第2章

第一ゲームの説明が始まった。

恭子「第一ゲームは”たまたま蹴り潰しゲーム”です」
武男と正男があわてた。
武男「潰さないって言ったじゃないっすか」
恭子「だれもあんた達の金玉を潰そうなんて言ってないわ。潰すのはこの温泉饅頭よ」
恭子は丸い温泉饅頭を手に持った。
ここの温泉饅頭は少し小さめで、ちょうど金玉くらいの大きさであった。
恭子「まず、各チームのリーダーは、相手チームの男のパンストの中の金玉の上に、温泉饅頭をそれぞれ2個セットします。各チームの女性選手は、その温泉饅頭を蹴り潰します。ただし、男が両膝をついたら負けです。金玉を蹴らずに温泉饅頭だけをうまく蹴り潰したチームが勝ちです」
「そっ、そんなー」
武男と正男が顔を見合わせた。
「おもしろそうだわ」
「わたしにやらせてよ」
「大丈夫よ。金玉は蹴らないから」
女性達はやる気満々だ。
亜美は正男の、由美は武男のパンストの中の金玉の上に温泉饅頭を2個ずつセットした。
各チームから女性選手が選ばれた。

「武男、絶対膝をついちゃだめよ」
「正男、痛くても我慢するのよ」
女性達から声援が飛んだ。
恭子「”たまたま蹴り潰しゲーム”よーい、始め」
女性選手が男の股間を蹴り始めた。
パンッ。
武男「ウエッ」
金ちゃんチームの女性選手は左の温泉饅頭をうまく蹴り潰したが、その下の金玉まで蹴ってしまった。
武男が片膝をついた。もう片方もつきそうだ。
「膝をついちゃダメ。がまん、がまん」
金ちゃんチームの女性がいった。
パコンッ、パコンッ。
正男「グエッ」
玉ちゃんチームの女性選手は温泉饅頭2個を同時に連続して蹴った。正男は前かがみになり両膝をつきそうになった。
「あっ、あぶない。がんばって」

玉ちゃんチームの女性がいった。
女性選手のたまたま蹴りが続いた。
武男「ウガッ」
正男「グガッ」
恭子「はい、そこまで。温泉饅頭を取り出して下さい」
金ちゃんチームの温泉饅頭は左は完全に、右は半分潰れていた。玉ちゃんチームの温泉饅頭は左右とも半分づつ潰れていた。
恭子「金ちゃんチームの勝ち」
「イエーイ」
金ちゃんチームの女性達が喜んだ。
「くやしーい」
玉ちゃんチームの女性達が悔しがった。

第二ゲームの説明が始まった。
恭子「第二ゲームは”やかんつるしゲーム”です。男のパンストの股間の下には小さな穴があけてあります。各チームの女性選手は、その穴から金玉だけを2個とも引っ張り出して下さい。取り出した金玉を紐で縛り、その紐にやかんをつるします。女性選手はビンビールを一息で飲みま

す。飲みきれずビンに残ったビールを金玉につるしたやかんに入れます。男がやかんを床につけたら負けです」
各チームの女性選手が選ばれた。
「ようし、今度は勝つわよ」
玉ちゃんチームの女性選手がいった。
金玉の取り出しが始まった。
「うまくでないわね」
「ほら、でてきた。でてきた」
女性選手が金玉を取り出した。
温泉で玉袋か伸びきっていたため、金玉は男の股間に垂れ下がり揺れ動いた。
「なにそれ。ブハハハハハ」
黒のパンストなので、垂れ下がって揺れる金玉だけが目だってしまい、女性達に大うけした。
亜美「玉袋が伸びているので縛りやすいわよ」
恭子「ゲームの前に温泉に入れといてよかったでしょ。玉袋が伸びている方がおもしろいわよ」
伸びきった玉袋をチームリーダーが鷲づかみにして下に引っ張り、女性選手が金玉を紐で縛った。こうすると男の股の下のほうに金玉だけが浮かんでいるようで女性達は更に大笑いした。
紐で縛られた金玉に亜美と由美はやかんをぶらさげた。

恭子「準備ＯＫね。”やかんつるしゲーム”よーい、始め」
最初の女性選手がビールを一気飲みした。
「イッキ、イッキ、イッキ」
女性達が声援を送った。
金ちゃんチームの女性選手はビールの三分の一を、玉ちゃんチームの女性選手はビールの半分を飲んだ。
恭子「選手は飲みきれなかったビールをやかんに入れて下さい」
女性選手が金玉にぶらさげられたやかんにビールを入れはじめた。
「袋がちぎれるまでがまんするのよ」
女性達が応援した。
武男「ウエーッ」
正男「グエーッ」
やかんにビールが増えるにつれ男の玉袋は更に伸びていった。
次の女性選手がビールを一気飲みした。
「イッキ、イッキ、イッキ」
女性達が声援を送った。
金ちゃんチームの女性選手はビールの四分の一を、玉ちゃんチームの女性選手はビールの三分

の一を飲んだ。
女性選手が飲み残したビールをやかんに入れた。
武男「ウエエーッ」
正男「グエエーッ」
男の玉袋は更に伸びた。
三人目の女性選手がビールを一気飲みした。
「イッキ、イッキ、イッキ」
女性達が声援を送った。
金ちゃんチームの女性選手はビールの十分の一を、玉ちゃんチームの女性選手はビールを全部飲んだ。
「正男、安心して全部飲んだわよ」
玉ちゃんチームの女性選手が得意になっていった。
「武男、ごめんね。私、ビール弱いのよ」
金ちゃんチームの女性選手が手を顔の前で合わせていった。
「がまんしてよ。ビールを少しづつ入れるわよ」
金ちゃんチームの女性選手が飲み残したビールをやかんに入れ始めた。
武男「ワッ、ち、ちぎれる」

武男が腰を落としたため、やかんが床につきそうになった。
「なにやってんの。足をふんばって」
「絶対、床につけちゃダメよ」
金ちゃんチームの女性達が武男に声援を送った。
更にビールが武雄のやかんに入れられた。武男の玉袋は膝まで伸びている。
武男「もうだめだ」
武男が膝を曲げてやかんを床につけてしまった。
恭子「玉ちゃんチームの勝ち」
「イエーイ」
玉チャームの女性達が喜んだ。
亜美「もう、なにやってんのよ。この金玉」
亜美は武男の金玉を指で弾いて悔しがった。

第三ゲームの説明が始まった。
恭子「第三ゲームは”蹴り違えないでゲーム”です。わたしが蹴る足を右、左といいますから、言われた方の足で男の金玉を蹴って下さい。ただし、足が金玉にあたらなかったり、あてすぎて男を倒したら負けです」

各チームの女性選手が選ばれた。
「武男、痛くてもがまんするのよ」
「正男、倒れたらお仕置きよ」
女性達が盛り上がった。
恭子「”蹴り違えないでゲーム”を始めます。」
女性選手は男の股間の下に浮かんだように見える縛られた金玉に狙いを定めた。
恭子「右蹴って。」
ポンッ。ポンッ。
武男「ウッ」
正男「グッ」
軽い蹴りだが武男と正男は顔をゆがめた。
恭子「左蹴って」
ポンッ。ポンッ。
武男「ウウッ」
正男「ググッ」
恭子「右蹴らないで、左蹴る」
ポンッ。ポンッ。

武男「ウウウッ」
正男「ググッ」
「危ない、危な。」
金ちゃんチームの女性選手が左右を間違いそうになって足をもつらせた。
「ハハハ、間違っちゃダメよ」
そのようすが女性達にうけた。
恭子「左蹴らないで、右蹴らない」
ポンッ。
正男「ギャッ」
「あっ、しまった」
玉ちゃんチームの女性選手が間違って右足で金玉を蹴ってしまった。そのうえ、酔いがまわったせいか、蹴りが強すぎて正男がうずくまった。
恭子「金ちゃんチームの勝ち」
「イエーイ。」
金チャームの女性達が喜んだ。
正男「もうダメです。勘弁してください」
由美「なにいってるのよ。次は負けないわよ」

次のゲームの準備が始まった。

第3章

第四ゲームの説明が始まった。
恭子「第四ゲームは”パン食い競争ゲーム”です。今度は、やかんの代わりにアンパンを金玉につるします。男は二つの椅子に片足ずつのせ、足を開いて立ちます。女性選手は金玉にぶらさがったアンパンを手を使わないでくわえます。先にアンパンを食いちぎった方が勝ちです。ただし、チームリーダーは相手チームの男の金玉をはしで揺らして妨害をします」
「あたし、くわえるの得意でーす」
酔いもまわり、女性達はまた盛り上がった。
亜美と由美は自分のチームの男の金玉にアンパンをつるし、女性選手を選んだ。
男が足を開いて椅子の上に立った。男の股間の下で女性選手が口を開いて構えた。
恭子「”パン食い競争ゲーム”はじめ」
「彼のと思ってしっかりくわえなさいよ」
玉ちゃんチームの女性がいった。
亜美と由美は金玉をはしでゆらして妨害した。

玉袋が伸びているので金玉は大きく揺れ、それにあわせてアンパンも大きく揺れた。
「あーん、そんなにゆらさないでよ」
「なかなか、うまくくわえられないわね」
女性選手はアンパンをくわえることに熱中した。
玉ちゃんチームの女性選手がアンパンをくわえ金玉を引っ張った。
正男「グッ」
金ちゃんチームの女性選手もアンパンをくわえ金玉を引っ張った。
武男「ウッ」
玉ちゃんチームの女性選手がアンパンを食いちぎった。
「ムシャ」
女性選手がアンパンを食いちぎった弾みで金玉は大きく揺れ動き、女性選手の額にあたった。
ペチッ。
正男「グエッ」
女性選手は額にあたった金玉をなにげなく片手で振り払った。
パシッ。
正男「グゲーッ、グゲーッ」
正男が女性選手の顔の上で、金玉を押さえて苦しがった。

「あれ。正男、どうしたの」
女性選手が不思議がっていった。
恭子「玉ちゃんチームの勝ち」
「イエー、イエー」
玉ちゃんチームの女性達が喜んだ。
亜美「次は負けないわよ」
亜美が武男の金玉をはしでつかんで悔しがった。
武男「ウゲッ」

第五ゲームの説明が始まった。
恭子「第五ゲームは”パンチングゲーム”です。両チームの女性選手の腰を浴衣の帯でつなぎます。男は女性選手の両端に足を開いて立ちます。相手チームの男の金玉をパンチした方が勝ちです。勝負は三回行ないます」
武男「それじゃ潰れてしまいますよ」
恭子「女のパンチくらい大丈夫よ。文句いわないでさっさと立ちな」
武男と正男は伸びた玉袋を揺らしながら歩いて両端に立った。
「あたしボクシングやったことあんのよ。まかせて」

金ちゃんチームの女性がいった。女性達はまたまた盛り上がった。
各チームから女性選手が選ばれた。女性選手の腰を数本の浴衣の帯でつなぎ準備ができた。
恭子「”パンチングゲーム”一回戦、始め」
女性選手は懸命に引っ張りあった。
「ガンバレ、ガンバレ」
応援の女性達の力が入った。
玉ちゃんチームの女性選手が武男の金玉をパンチしたが、わずかに届かなかった。
武男「ヒッ」
金ちゃんチームの女性選手がじりじりと相手を引っ張り返し、正男の金玉をパンチした。
ポコッ。
正男「グギャ」
正男の金玉がぷらぷらと揺れた。
恭子「一回戦は金ちゃんチームの勝ち。二回戦、始め」
二人目の女性選手が引っ張りあった。
金ちゃんチームの女性選手のパンチが正男の金玉をかすった。
正男「ウヘッ」
恭子「浅い。まだまだよ」

玉ちゃんチームの女性選手がいっきに引っ張り返し、武男の金玉をパンチした。
ポコッ。
武男「ウギャッ」
武男の金玉がぷらぷらと揺れた。
恭子「二回戦は玉ちゃんチームの勝ち。三回戦は男どうしで行ないます。ただし、男の場合は腰ではなく、金玉を縛った紐に浴衣の帯をくくりつけます。両端にはチームリーダーが立ち、男は四つんばいになって引っ張り合います。女性には金玉がないので男は女性の股間にキスをします」
武男と正男は四つんばいになり、亜美と由美は二人の金玉を浴衣の帯で結んだ。
恭子「三回戦、始め」
武男と正男が軽く引っ張り合った。
亜美「ほら、ここよ」
由美「もう少しよ。がんばって」
亜美と由美が股間を突き出して応援した。
武男「ウォッ」
正男「グォッ」
二人の男は目の前の女性の股間にキスをしようと相手を引っ張ったが、金玉が痛くて力が入らない。

「なにやってんのよ。もっと引っ張りなさいよ」
「それじゃ、勝てないよ」
女性達のヤジが飛んだ。
恭子「あんたたち、まじめに引っ張らないのね。もういいわ」
恭子が金玉をつないだ浴衣の帯の真中を引っ張り上げた。
武男「ウォーッ」
正男「グォーッ」
恭子に金玉を引っ張られ、二人の男はお尻をぶつけあった。その勢いで四個の金玉もぶつかりあった。
ペチッ。
「ホゲッ」
武男と正男が顔をゆがめた。
恭子「男どうしじゃ勝負にならないので、再度三回戦を行ないます。女性選手は準備して下さい」
「よーし、がんばるぞ」
三人目の金ちゃんチームの女性選手が力強くこぶしをぶんぶん振り回した。
正男「やっ、やばそうだな」
恭子「三回戦、始め」

三人目の女性選手が引っ張りあった。
金ちゃんチームの女性選手のパワーはすごく、すぐに相手の女性を引き倒して正男に近づいた。
正男「くっ、来るな」
金ちゃんチームの女性選手が正男の金玉に強烈なパンチを放った。
「オリャッ」
バコッ。
正男「グギャーッ」
正男は白目をむいて女性選手の足元にうずくまった。
恭子「はい、そこまでよ。2対1で金ちゃんチームの勝ち」
金ちゃんチームの女性選手がガッツポーズをして勝ち誇った。
「ヤッター、イエー」
金ちゃんチームの女性達が喜んだ。
由美「正男。いつまでうずくまってるの」
正男は金玉を押さえてうずくまったままだった。

第六ゲームの説明が始まった。
恭子「第六ゲームは”金玉さんが潰れたゲーム”です。今回は全員参加です。正男はうずくまっ

たままなので、武男だけでやります。女性のみなさんは向こうの開始線のところに並んで下さい。
私が後ろをむいて、金玉さんが潰れた、といいますからその間だけ動きます。前にいる武男の金玉を早く握った方が勝ちです。ただし、私が前を見ているときに動いた人は失格ですから座ってください」
女性達が騒ぎながら移動を始めた。酔いがまわったのか足にきている女性もいた。
恭子「では、”金玉さんが潰れたゲーム”を始めます」
恭子が後ろを向いた。
恭子「金玉さんが潰れた」
女性達はすばやく動こうとした。
恭子が振り返った。酔いのせいか数人の女性がふらついた。
恭子「はい、失格よ。次いきます。金玉さんがつーぶれた」
また、数人の女性が動いてしまい失格となった。
何度か繰り返し、亜美と由美だけが残った。
恭子「金玉さんがつぶれーた」
由美「はい」
武男「ウッ」
由美が武男の金玉を握った。

恭子「玉ちゃんチームの勝ち」
「いいぞ。イエー」
玉ちゃんチームの女性達が喜んだ。
亜美「次をみてらっしゃい」
亜美が悔しくて武男の金玉をギュッとつかんだ。
武男「ウガッ」

第七ゲームの説明が始まった。
恭子「第七ゲームは”尻相撲ゲーム”です。各チームの女性選手は相手チームの男と尻相撲で対戦します。土俵はこの座布団です。押し合って座布団から出た方が負けです」
武男「やっと俺達が活躍できそうだな」
正男「尻相撲なら得意なんだ。相手が女なら楽勝だぜ」
亜美「ねえ由美。男達もやる気になってることだし、このあたりでリーダー対決といかない？」
由美「いいわよ。負けないわよ」
第七ゲームが始まろうとしていた。

第４章

恭子「女性選手が決まったところで、第七ゲームの準備を行ないます。ここに長さの調整できるストラップがあります。女性選手はこのストラップを対戦相手の男の首にかけ、下のフックを金玉を縛ってある紐にひっかけます。長さは女性選手の好みで調整して下さい」

亜美と由美は対戦相手の男の首にストラップをかけ、フックを金玉の紐に引っ掛けた。

「金玉は大切に首にぶら下げておかなくちゃね」

「こりゃ、金帯ストラップね」

「これで袋はいらないんじゃない」

女性達がおもしろがった。

亜美と由美は対戦相手の男の金玉が、自分の股間の高さになるようにストラップの長さを調整した。

「なんのまねだろう」

武男と正男はわけがわからなかった。

恭子「一回戦は亜美対正男の対決よ。二人とも座布団の上にあがって」

二人が座布団の上にあがり、正男は亜美の方へ尻を向けようとした。

恭子「ただの尻相撲ではおもしろくないので、今回はお互い向き合って股間で押し合います」

正男「えっ」

武男「そ、そんなー」

「プハハハ」

女性達が二人の男があわてたのを見て笑った。

恭子「文句言ってないで、始めるわよ。お互い向かい合って」

正男はしぶしぶ亜美と向かい合った。

亜美は浴衣の前を開けて裾を持ち上げ、余裕で微笑んだ。

正男はパンティにつつまれた亜美のすっきりした股間を見てやばいと思った。

恭子「”尻相撲ゲーム”一回戦、始め」

亜美「それ。」

亜美が正男の方へ軽く股間を突き出した。亜美のパンティが正男の金玉に軽くふれた。

正男「ヒッ」

正男があわてて腰を引いた。

「なにやってんのよ。尻相撲、得意じゃなかったの」

「女が相手なら楽勝なんでしょ」

玉ちゃんチームの女性達が正男にヤジを飛ばした。

亜美「そ、そ、それ」

亜美は2回フェイントを行ない、正男が腰を伸ばしたところへ思いきり股間を突き出した。
パコンッ。
正男の金玉が亜美の股間と正男の股間の間に挟まって押しつぶされた。
正男「グガーッ」
正男は座布団の外へ押し出され、金玉を押さえてうずくまった。
恭子「亜美の勝ち」
亜美「さっきの自信はどうしたの。それ、それ」
亜美は足元でうずくまった正男の方へ股間を数回突き出して勝ち誇った。

恭子「二回戦は由美対武男ね。二人とも座布団の上にあがって。」
「由美、一発で押し出してよ。」
玉ちゃんチームの女性がいった。
由美「まかせといて、そりゃ」
由美は座布団の上にあがり、浴衣の前を開けて股間を勢いよく突き出した。
それを見た武男はなかなか座布団にあがろうとしない。
恭子「武男、もたもたしないでさっさと座布団の上にあがんな」
武男はいやいや座布団の上にあがったものの、由美のすっきりした股間を目の前にして最初か

ら腰が引けている。
「プハハハ、そんなんじゃ勝てないわよ」
「そうよ。負けたら承知しないわよ」
金ちゃんチームの女性達が武男にいった。
恭子「”尻相撲ゲーム”二回戦、始め」
由美「ほれ、ほれ」
由美が股間を突き出した。
武男「わっ、わっ」
武男は腰を引いて逃げてばかりだ。
恭子「これじゃ勝負にならないので、女性がストラップを引っ張ることを認めます」
由美がストラップを引っ張ると金玉も引っ張られ、武男はあわてて腰を伸ばした。
由美「いただき、そりゃ」
由美が勢いよく股間を突き出した。
パコンッ。
武男の金玉が由美の股間と武男の股間の間に挟まって押しつぶされた。
武男「ウガーッ」
武男は座布団の外へ押し出された。

由美の強烈な股間の突き出しを金玉に受け、武男は由美の足元で金玉を押さえてもがいている。
恭子「由美の勝ち」
由美「イエー、イエー、そりゃ」
由美は足元でもがく武男の方へ股間を勢いよく突き出して勝ち誇った。
恭子「女の方が強すぎて勝負にならなかったわね。一対一で勝負がつかなかったので、三回戦は女どうしで対戦します」
亜美「由美、勝負よ」
由美「負けないわよ」
亜美と由美が座布団の上にあがり、浴衣の前を開いてパンティを見せた。
恭子「”尻相撲ゲーム”三回戦、始め」
亜美「それ」
由美「そりゃ」
亜美と由美が勢いよく股間をぶつけ合った。
パコンッ。
二人とも相手の強烈な股間の突き出しを受けてよろめいたが、なんとか踏ん張って座布団の上に留まった。

「それ、もう一丁」
再度、亜美と由美の股間が勢いよくぶつかった。
パコンッ。
「うわー」
股間が激しくぶつかり合った勢いで二人とも座布団の外へ飛び出した。
亜美「なかなかやるわね」
由美「あんたもね」
亜美と由美は平気な顔で言い合った。
「うへー、すっ、すごい」
武男と正男は迫力ある股間のぶつけ合いを見て腰を抜かした。
恭子「また勝負がつかなかったので、四回戦は男どうしの対戦とします。武男と正男、驚いてないで、次はあんた達の番よ」
亜美と由美はストラップの長さを、金玉が二人の股間の高さになるように調整した。
「こりゃ、楽しみだわ」
「武男、がんばってよ」
「正男、負けないでよ」

女性達が声援を送った。武男と正男はしぶしぶ座布団の上にあがって向かい合った。
恭子「”尻相撲ゲーム”四回戦、始め」
武男「いくぞ。それ」
武男が恐る恐る軽く股間を突き出した。
正男「わわっ」
正男があわてて腰を引いた。
正男「今度はこっちからいくぞ」
正男がゆっくりと股間を突き出したため二人の金玉が少し触れあった。
ペチッ。
武男「お、おい。危ないじゃないか」
武男が正男に文句をいった。
恭子「あんたたち、なにやってんの。もっと、思いきって股間で押し合いなさいよ。女性選手は手伝ってあげて」
亜美「いくわよ」
由美「それ」
亜美と由美が武男と正男のお尻を後ろから思いきり押した。４個の金玉が武男と正男の股間の間にはさまって押しつぶされた。

武男「ウガッ」
正男「グガッ」
武男と正男は股間を押さえて座布団の上にうずくまった。
恭子「こりゃ、ダメだわ。第七ゲームは引き分け」
女性達が大笑いした。

第八ゲームの説明が始まった。
恭子「第八ゲームは”ペットボトル落としゲーム”です。まず、金玉を左右別々に輪ゴムでくくります。リーダーは右の金玉をテーブルの上に固定して下さい。ここに水が半分入ったペットボトルがあります。女性選手はこのペットボトルをさかさまにして、キャップが金玉にあたるように落とします。落とす高さを少しずつ高くしていきます。キャップが金玉にあたらなかったら負けです」
「水半分なんてあまいんじゃない。いっぱい入れちゃいなさいよ」
女性達がまた盛り上がった。
「武男、痛くても動いちゃだめよ」
金ちゃんチームの女性がいった。
「正男の金玉ならペットボトルくらい大丈夫よ」

玉ちゃんチームの女性がいった。
各チームの女性選手が選ばれた。
亜美と由美は自分のチームの男の金玉を左右別々に輪ゴムでくくり、右の金玉を指先でテーブルの上に押さえつけて固定した。
恭子「落とす高さはこのコップの高さで測ります。まず、女性選手はコップ一個の高さにペットボトルを持ち上げて下さい」
女性選手がペットボトルをさかさまにし、押さえつけられた金玉の上に持ち上げた。
武男と正男は目を見開いて、自分の右の金玉を見つめた。
恭子「”ペットボトル落としゲーム”始め」
女性選手がペットボトルをコップ一個の高さから落とした。
ポンッ。
武男「ウッ」
正男「グッ」
女性選手が落としたペットボトルが二人の右の金玉に命中した。
恭子「コップの二倍の高さから落とします」
女性選手がペットボトルをコップの二倍の高さから落とした。
ボコッ。

武男「ウウッ」
正男「ググッ」
これまたペットボトルは二人の右の金玉に命中した。武男が痛みのあまり金玉を引っ込めそうになった。
亜美「金玉を動かしちゃダメよ。がんばって」
亜美が指先で右の金玉を押さえつけた。
恭子「コップの三倍の高さから落とします」
女性選手がペットボトルをコップの三倍の高さから落とした。
ボコンッ。
武男「ウギャッ」
正男「グギャッ」
金ちゃんチームの女性選手の落としたペットボトルは武男の右の金玉に命中した。
酔いのせいか玉ちゃんチームの女性選手の手元が狂い、ペットボトルは正男の左の金玉に命中した。
恭子「金ちゃんチームの勝ち」
「いいぞ、イエー」
金ちゃんチームの女性達が喜んだ。

「こんなペットボトルを落としたらどうなるかしら」
金ちゃんチームの女性選手が、水のいっぱい入った大型ペットボトルをさかさまにし、コップの三倍よりかなり高いところから自分の股間に数回落としてみせた。
ドスッ。ドスッ。
「武男、たいしたことないわよ」
金ちゃんチームの女性選手が、大型ペットボトルをさかさまにして持ち上げ、武男の右の金玉に狙いを定めた。
武男「わわっ、やめてー」
武男が暴れて金玉を動かそうとしたので、亜美は武男の右の金玉を指で押さえつけて固定した。
亜美「いいわよ。」
武男「つっ、つぶれるー」
女性選手が大型ペットボトルから手を離した。
武男はたまらず目を閉じた。
ドスッ。
亜美はペットボトルがあたる直前に、押さえていた指ですばやく武男の金玉を包んだ。おかげで大型ペットボトルは亜美の指にあたり、武男の金玉は助かった。
武男「ヒエー」

亜美「フフフ、男にしてはよくがんばったわね」
「いいぞ、武男。イエー、イエー」
金ちゃんチームの女性達が武男を誉めた。
由美「悔しいわ。次を見てらっしゃい」
由美が悔しさのあまり、ペットボトルで正男の右の金玉を叩いた。
パコッ。
正男「ホゲッ」
正男が金玉を押さえてひっくり返った。
第九ゲームの説明が始まろうとしていた。

第５章

第九ゲームの説明が始まった。
恭子「次は、いよいよ最終ゲームです。最終ゲームは”握力測定ゲーム”です。各チームの女性選手はこの握力計で右手の握力を測定します。同じ力で自分のチームの男の左の金玉を握ります。男が握力を言います。その数値が握力計の数値に近い方が勝ちです」
「あたし握力強いのよ。握りつぶしちゃうかもね」

女性達は手を握りしめながら盛り上がった。
武男「こんどこそ潰れちゃいますよ」
恭子「女の握力くらい大丈夫よ。さっさと女性達の方を向いて足を開きな」
両チームとも女性選手には右利きの女性が選ばれた。
女性選手が握力計を握り、その数値を恭子は記録した。
恭子「なかなか強いわね。では、女性選手は男の後ろから左の金玉をつかんで下さい」
女性選手が男の後ろから股間に手を入れ、縛られた左の金玉をつかんだ。武男と正男はおもわず握られた自分の左の金玉を見つめた。女性の美しい指が左の金玉をつかんでいた。
「こうやって親指をしっかりと金玉に押し当てて握るわよ。武男、ちゃんと測定してよ」
金ちゃんチームの女性選手が金玉を指で軽く押しながらいった。
「ウヘー。そんなにクリクリしないで」
親指で左の金玉を押された武男が悲鳴をあげた。
「わたしはこんなふうに手のひらでもむように握るわよ。正男、しっかり測ってね」
玉ちゃんチームの女性選手が金玉をもみながらいった。
「ウギャー。そこはさわらないで」
正男が副睾丸をつかまれて悲鳴をあげた。
「まだ、たいして力を入れてないのに悲鳴をあげるなんて、情けないわね」

女性選手に金玉1個を軽くつかまれただけで悲鳴をあげている二人の男を見て、ある女性がいった。
恭子「二人ともまだ始まってないのよ。この握力測定機は感度が悪いので２０秒間握ります。では、〝握力測定ゲーム〟はじめ」
「えい」
女性選手が金玉を握る手に力を入れた。
武男「ウオー、ウガー、潰れるー」
正男「グオー、グガー、止めてー」
男達の形相が変わった。
「ワハハハハ。こりゃいいわ」
「金玉一個を握られただけで地獄にいったような顔しちゃってさ」
「ほんと、日頃のウサが吹っ飛ぶわね、それ、がんばれ」
女性選手に金玉一個を握られて苦しそうな男の顔を女性達は楽しんだ。
恭子「1、2、3……」
恭子が秒読みをした。
「苦しんでばかりいないでちゃんと測定してよ」
玉ちゃんチームの女性がいった。

武男「ウオー、もうだめー、限界だー」
正男「グオー、お願い、離してー」
　苦しさに耐えかねて二人の男が暴れ出した。それでも、女性選手に後ろから金玉を握られているので倒れることもできない。
恭子「はい、そこまで。１０秒もたなかったわね」
「あまーい、あまーい」
「まだ半分よ」
　女性達のヤジが飛んだ。
恭子「握力は何キロだったでしょうか」
　二人の男は泡を吹いていて言葉にならない。武男と正男は小声ながらなんとか恭子に耳打ちした。
恭子「発表します。武男測定機は１２０キロ、正男測定機は１００キロです。玉ちゃんチームの勝ち」
「よくがんばった。ぜんぜんちがうけど」
　玉ちゃんチームの女性達が喜んだ。
亜美「いくら苦しかったからって、そんなにあるわけないじゃない。バカじゃない」

恭子「それではゲームの結果を発表します。金ちゃんチーム４点、玉ちゃんチーム４点で同点です。バツゲームはリーダーによる決勝ゲームで決めます」
　恭子が遊戯室からゴムボールを借りてきた。
恭子「決勝ゲームは”ボール投げゲーム”です。このゴムボールを相手チームの男の金玉めがけて投げます。三回投げて金玉にあたった数が多い方が勝ちです」
亜美「ボール投げならまかせて。金玉にあてるくらい簡単よ」
由美「ボール投げは得意よ。思いっきり金玉にぶつけてやるわ」
　亜美と由美はボールを金玉の方へ投げるまねをした。
武男「わわっ、勘弁して下さい」
正男「今度こそ潰れちゃいますよ」
恭子「ゴムボールくらい大丈夫よ。ほら」
　恭子はゴムボールを亜美と由美の股間へ投げつけた。
　パコン。パコン。
亜美「ぜんぜん大丈夫よ」
由美「軽い、軽い」
　亜美と由美は平気な顔でいった。
「そりゃ、ついてないもんなー」

「俺達だって、好きでぶら下げてんじゃねーよなー」
武男と正男は自分の股間をみながら、うらやましそうにつぶやいた。
恭子「ぶつぶつ言ってないで、始めるわよ。男は手を後ろで組んで股を広げて立ちます。あたった数は右、左それぞれ1金玉とします。男はボールがどちらの金玉にあたったか、はっきり言ってね」
正男が股を広げて立った。ゴムボールを持った亜美は真剣な表情で股間にぶら下がった金玉を狙った。
亜美「エイ」
亜美がゴムボールを投げた。
パコン。
金玉がプラプラ揺れた。
正男「ウゲッ。み、右金玉、あたりー」
亜美「よーし、次いくわよ」
亜美が2球目を投げた。
パコーン。
正男「ウガーッ」
正男がさっきより苦しそうに金玉を押さえた。

恭子「苦しんでないで、どっちの金玉にあたったか早くいいなさいよ」
正男「両金玉、あたりー。ウウーッ」
亜美「よし、2金玉ゲットね。次もあてるわよ」
亜美の3球目は調子に乗りすぎて手元が狂い、ゴムボールは金玉の少し下を通過した。
正男「はずれー」
亜美「あっ、しまった」
亜美がペロっと舌を出した。
恭子「金ちゃんチームの得点は3金玉です」
次に、武男が股を広げて立った。由美も真剣な表情で股間にぶら下がった金玉を狙った。
由美「オリャ」
由美がゴムボールを投げた。
パコン。
武男「ウゲッ、ひ、左金玉、あたりー」
由美「この調子で、ソリャ」
パコン。
武男「ウゲッ、み、右金玉、あたりー」
由美「よーし、2金玉取ればわたしの勝ちね。ホリャ」

ビコン。
武男は平気な顔をしている。あたったはずなのに、どうしてだろう。女性達が首をかしげた。
武男「はずれー、サオでした」
由美は力が入りすぎて、ゴムボールを武男のサオにあててしまった。
由美「あーん、しまった」
恭子「玉ちゃんチームの得点は2金玉です。したがって、3金玉対2金玉で金ちゃんチームの勝ち」
「やったー」
金ちゃんチームの女性達が大喜びした。
恭子「バツゲームは玉ちゃんチームにやってもらいます」
由美「みんな、ごめんね」
由美が頭をかいた。

恭子「これより、バツゲームをはじめます。負けた玉ちゃんチームの女性は温泉饅頭を2個ずつもらって下さい。浴衣を脱いで、その温泉饅頭をパンティの中に入れ股間にセットします。勝った金ちゃんチームの女性は玉ちゃんチームの女性の股間を蹴って温泉饅頭を蹴り潰します。では、準備して下さい」

玉ちゃんチームの女性は温泉饅頭を2個受け取ると、パンティを広げて股間にセットした。玉ちゃんチームの女性の股間がもっこりした。
正男「俺達と同じだな。かっこわりー」
由美「うるさいわよ。覚えてらっしゃい」
中にはパンティの股間部分に温泉饅頭が収まりきらず、温泉饅頭を縦にセットする女性もいた。
恭子「これより金玉潰しバツゲームを始めます。よーい、始め」
「こら、まてー」
「簡単には蹴らせないわよ」
「ワー、キャー」
パコン。ポコン。
温泉饅頭は蹴った女性の足の甲と蹴られた女性の股間との間に挟まり簡単に潰れた。
ブチュ。グチャ。
女性達は騒ぎながら金玉潰しバツゲームを楽しんだ。
恭子「はい、それまでよ。みんな金玉は潰れたかな」
「みごとにぐしゃりだわ」
温泉饅頭は玉ちゃんチームの女性達の股間で完全に潰れていた。
恭子「今度は手伝ってくれた武男と正男のお礼に、パンティの中の潰れた温泉饅頭を食べさせて

あげましょう」
「ワハハハ。ほら、おいしいわよ」
女性達は潰れた温泉饅頭を武男と正男の口に押し込んだ。
武男と正男はなにも食べてなかったこともあって、女性の股間の匂いのついた潰れた温泉饅頭をモグモグと食べた。

第６章

恭子「バツゲームのしめくくりに、本物の金玉を蹴り潰します」
まずいと思った武男と正男は逃げ出そうとしたが、金玉の紐を引っ張られて逃げられず、すぐに大勢の女性達に取り押さえられた。
女性達は二人の男の足を広げ、金玉を握って締め上げた。
武男「ウギャー。わかった、わかりましたって」
正男「フギャー。もう、逃げませんから力を緩めて下さい」
恭子「金玉を握られたらどうしようもないようね。おとなしく足を開いてそこに立って」
女性達が金玉から手を離した。
武男「そのかわり温泉饅頭と同じようにゴムと紐は外して下さいよ」

恭子「わかったわ。じゃ、１０秒で外してちょうだい」
恭子が秒読みを始めると、武男と正男はあわてて自分の金玉からゴムと紐を外した。
恭子「ゴムと紐を外したんだから、温泉饅頭と同じように金玉を固定させてもらうわ。亜美、由美、例の物お願いね」
亜美「温泉へ入る前にはいてたパンティよ」
由美「温泉饅頭と同じように金玉をこのパンティの中に入れてもらうわ」
武男と正男は自分たちが言い出したことなので、仕方なく亜美と由美のパンティをはいた。ところが、女もののパンティでは片玉しか収まらず、もう片方の金玉がポロンとこぼれ出た。
「プハハハハ。なに、それ」
「まるでパンティのお飾りね」
こぼれた金玉を見た女性達が大笑いした。
恭子「２個は無理のようね。しかたないから１個で勘弁してあげるわ。どちらかの金玉をパンティの中に入れてちょうだい」
武男「右玉、左玉、うーん迷うなあ。えーい右玉だ」
正男「じゃ、俺は左玉にするよ」
武男は右の金玉を、正男は左の金玉をパンティに入れて固定した。
「久しぶりに恭子の金玉蹴りが見れるわね」

「楽しみだわ。一発で蹴り潰してね」
「パンティの中の金玉は温泉饅頭と同じ運命をたどりまーす」
女性達がいった。

恭子「お二人さん、覚悟はいい」
武男「お願いです。蹴り潰さないで下さい」
正男「二度と覗きはしませんので、金玉を蹴り潰すのだけは勘弁して下さい」
二人の男は祈るような気持ちで恭子にいった。
「でも、女性達は金玉を蹴り潰された男がどうなるか見たいようだし、どうしようかな」
恭子は二人の金玉を足の甲で持ち上げながらいった。
「そろそろ、いくよ」
恭子が足を振り上げた。二人の男は覚悟をきめて生唾を飲み込んだ。
パコーン。
武男「ウゲー」
パコーン。
正男「グゲー」
恭子の足の甲は確実に金玉を蹴り上げた。二人の男は股間を押さえて恭子の足元にうずくまっ

た。
武男「み、右の金玉が、ウオー」
正男「ひ、左の金玉が、グオー」
「大丈夫、蹴り潰してないわよ。でも、こんど覗きやったら本当に潰すからね」
恭子は足元でもがいている二人の男を見下ろしていった。
亜美「やっぱり恭子はあまいわね」
由美「よかったね。恭子があまくて」
恭子「フフ、暫く悶えてていいわよ」

「ねえ、恭子。私も金玉蹴りたいわ。」
「恭子だけ蹴るなんて不公平だわ。私にも蹴らせてよ」
「私だって、金玉くらい簡単に蹴り潰してみせるわよ」
女性達から意見がでた。
恭子「あんた達、加減しらないからね。どうしても蹴りたいんなら足の甲にタオルを巻きつけて」
女性達は浴衣を着直してから、蹴り足の甲にタオルを巻いた。
恭子「どうやら、二人とも悶えてる場合じゃなくなったわよ。足を開いて女性達の前に立ってちょうだい」

武男「また蹴るんですか。勘弁して下さいよ」
正男「タオル巻いたくらいじゃ、潰れちゃいますよ」
恭子「そんなこと言ったってみんなやる気になってるし。それじゃ、パンティの両脇から金玉を出していいわ。これだと金玉がブラブラするんで潰れないと思うわ」
武男と正男はあわててパンティの両脇から金玉を取り出した。女性達は浴衣の裾を持ち上げて、金玉蹴りの準備をした。
恭子「金玉蹴り、始め」
いっせいに女性達が武男と正男の金玉に襲いかかった。
武男「わわー」
「逃がさないわよ」
武男が手で股間を隠して逃げまわったが、すぐに女性達につかまって足を広げられてしまった。
「ソレー」
パコーン。
武男「フンガー」
向こうでは正男が女性達につかまっている。
「エイ」
パコーン。

「ハイ」
パコーン。
正男「ウガガガー」
宴会場中を男が逃げては女性がつかまえ、足を広げては金玉を蹴った。ついに、武男と正男は1箇所に追い詰められた。
「このいまいましい金玉め。女の強さを教えてあげるわ。おりゃ」
パコーン。パコーン。
「ウーン」
強烈な金玉蹴りを受けて、武男と正男は白目をむいてのびてしまった。

武男と正男は気がつくと、パンティを脱がされて別々のテーブルの上にいた。股間を女性達の方へ向けて仰向けに寝かされ、足は開かれてテーブルの足に固定されていた。女性達に蹴り上げられた金玉は少し腫れているようであった。
亜美「よいしょ」
由美「こらしょ」
亜美と由美が洗濯場から物干台を借りてきて、武男と正男の乗ったテーブルの間においた。
亜美は武男の金玉を長い紐で縛り、その紐を物干台に引っ掛け由美に渡した。由美は紐の反対

側を正男の金玉にくくりつけた。
恭子は武男と正男の玉袋がいっぱいに伸びるように紐の長さを調整した。玉袋を吊るされた二人の男が腰を少し浮かすくらいの長さであった。
温泉と女性達の熱気で玉袋が伸びきっていることから、引っ張り上げられた金玉は、女性達から見ると男の腹の上に浮かんでいるように見えた。
恭子「反省タイムよ。二度と覗きなんかやらないように、そのかっこうで暫く反省してな」
武男「これなら、なんとか我慢できるな」
正男「これで見逃してもらえるなら、これまで我慢してきた甲斐があったというもんだぜ」
二人の男はすこし安心した。
恭子「玉袋ってかなり伸びるわね。体からこれだけ離れてると金玉の痛みもちがうのかな」
恭子が二人の男の金玉を指ではじいた。
ピーン。
武男「ウガーッ」
ピーン。
正男「グガーッ」
恭子「この程度でも苦しそうね。これだけ体から離れていても、金玉の痛みは同じなのね」
恭子は自分の股間を指ではじきながら、なにもぶら下がってなくてよかったと思った。

そこへ、亜美が冷たいビールを持って、武男の金玉の前にやってきた。
亜美「あー、のどが乾いたわ。冷たいビールがおいしいわね。武男の金玉、腫れちゃってかわいそうね。少し冷やしてあげるわ」
亜美が冷たいビールを口に含んで武男の玉袋に吹きかけた。
ブッ。
武男「気持ちいい」
由美も同じように冷たいビールを口に含んで正男の玉袋に吹きかけた。
ブッ。
正男「冷たいけどいい感じ」
ところが、伸びきっていた玉袋がビールに冷やされて縮みだした。
武男「ワワッ。金玉が引っ張られる」
正男「ウヘッ。金玉がいてー」
二人の男が腰を持ち上げだした。亜美と由美は更に冷たいビールを二人の玉袋に吹きかけた。
ブッ。ブッ。
武男「おおー。ち、ちぎれちまう。正男、もっと腰を浮かせろよ」
正男「いてー。武男、お前こそ腰を浮かせろ」
恭子「ほらほら、喧嘩してるとちぎれちゃうよ。お互い協力したら」

武男「よし、俺が腰を浮かせるからな。それ」
正男「おお、楽になった。今度は俺が腰を浮かせるぞ。それ」
恭子「その調子よ。お互い助け合ってね。さ、女性は宴会の続きやりましょう。たまには、このお二人さんにも冷たいビールをあげてね」
武男と正男はゲームの前に温泉に入れられた本当の意味がわかった。
女性達はつるされた金玉と、悶える二人の男を肴にして酒を飲み、セクハラ男のストレスを解消した。
こうして、女性達の温泉での宴会は大いに盛り上がった。